閏作品集

守屋明俊選

五十音順（今回は夕行から）

いたましさ

東京　髙橋　満利子

侘助の白すがすがし四方の朝
毎日をなほさら愛し年迎ふ
日向ぽこ湯呑みお供の穏かさ
めでたさも祝も遠く能登思ふ
この国のいたましさなり冬のなゐ
悲しみの慰む間なく雪の降る
大寒や昼の三日月所在なく
返り花そんなに多く咲かずとも

今を生きる

ウィーン　高橋　章子

反戦のシュプレヒコール着膨れて
イパネマの娘恋しき冬のカフェ
毛糸編む初音ミクめく付けネイル
春隣ヴィーナスの目の揺らめきぬ
ひらがなの多きメールや春近し
冴ゆる夜の小石一つも星となる
父の忌や大風纏ひ鷹一羽
今日といふ重み真白き寒卵

達磨

東京　高橋　美智子

煤払ひ消火器の奥念入りに
初旅は京都駅発〇番線
悴めば勘で差し込む鍵の穴
被藁を狭しと真白寒牡丹
土塊を零す寒禽朝の日矢
春寒し達磨の口の一文字
海神の凪の朝夕若布刈
山笑ふ移住の子らのかくれんぼ

凍蝶

東京　竹森美喜

寒禽の一声渡る明の空
早々と雨戸を閉つる開戦日
「即時停戦」ビラ受く年の瀬の街に
凍蝶の従容と地に伏せゐたり
音させぬやうに庖丁始かな
お降りの折しも帰る子へ孫へ
元日は永遠の震災忌となりぬ
避難所はビニールハウス大地凍つ

とうじ蕎麦

東京　田中京

避寒の鉢選別するも我が役と
誰にもあるエゴが友にも枯野原
生涯詠ふ決意の賀状眩しかり
虎落笛人間の業啼き止まず
ユーミンの歌添へ寒中見舞かな
楽しみはスキー帰りのとうじ蕎麦
山頂まで秋田駒ヶ岳晴れ雪ゆるむ
小綬鶏に呼ばれ明るき林へと

戯れ

東京　寺田幸子

天狼は天のスカラベ戯曲読む
激震の能登の四日を思ひけり
羽子つきの音の単純途切れたり
風花や詩の溢れ出す星が在る
寒の水飲む大三角を天心に
師の句集冬青空のなほ青く
戯れの道化のごとし春の雪
もう一度天の律動雪しづく

初笑ひ

東京　長井敦子

音の欲し銀杏落葉を踏みし時
かいつぶり同窓会は四年ぶり
野ぶだうの色のさまざま通り雨
水鳥を海賊船の波がもみ
スイッチバック車掌の傘の散紅葉
読み初む〝スピード太郎〟復刻版
みかんまで手持無沙汰の手が伸びる
初笑ひ砂糖も塩も真つ白で

群青

東京　中嶋　きよし

群青の海に散りゆく雪の華
石窟の墓碑に一花や初時雨
寒禽の声や結露の窓を拭く
色褪せし船の帆柱寒鴉
冬ざれの墓に小犬の写真立
冬鵙の声は胸刺す一矢かな
短日の段に我が影三つに折れ
凍ゆるむジャズピアノ弾くご住職

初声

東京　中村　敬子

初声は鸚鵡のつがひ美しき
獅子舞の子役上手に足を咬む
初暦老いには老いの初心あり
良人より倍も生き来て明の春
鳩なくや寒波の駅に人まばら
枯柳生きてゐますよしなやかに
寒禽の声はいづこへ能登の地震
闇深きほど輝ける寒卵

二つの空

東京　中村　東子

猫にご飯勇退のサンタクロース
空のビルビルの空なる初景色
暁の月ああ君に米(よね)こぼす
桃色の短冊選び初句会
綿入や北信五山誦んずる
きらきらと投げ込み寺の枯葎
賓頭盧の頭は天の原初不動
ありがたう言つて云はれていぬふぐり

初句会

埼玉　中村　幹子

初句会心に晴着まとひて来
地震に火事孤立の里に雪が降る
福詣一万六千歩は新記録
短日や八十八路ライフはスロースロー
孤り立て父の言葉よ冬木立
姉妹そろひて弥生鯛茶漬
座禅会や燭を動かす隙間風
雷雪に怯え寒さの増しにけり

花びらのごとく

東京　野沢慶子

元日に竜年告(の)らす大地震
冬日和思ひの外に金(きん)売れて
綿入を着るや母負ふ心地して
追ひつかれ追ひ越されゆく冬の道
花びらのごとく炬燵に集ひけり
干大根誰かの顔に似たる皺
さざんくわの花よけて干す布巾かな
春の雲なんだか長生きできさうな

小米雪

東京　橋本恭子

数へ日のすでに目出たき雲の色
数へ日の歯ブラシどれもそそけ立つ
大くさめ一つ現(うつつ)に戻りけり
木枯しやペテルギウスの爆ぜたるか
藁苞によそゆき顔の寒卵
寒卵遺伝子情報全解読
冬凪やファスナーのごと湾の水尾
終電と始発のあはひ小米雪

初暦

神奈川　長谷川菊男

ラグビーの早明戦は正座せり
鳥の声残りわづかな銀杏散る
青空へもういいかいと冬木の芽
たゆたふる水面のきらや初暦
咳止めの飴屋の叩く淑気かな
冷蔵庫に頼る生活寒卵
朝の日に浮かぶ臘梅阿弥陀堂
踏切の音のかすかに水仙花

冬野草

東京　畠山奈於

秋明菊暁闇(ぎょうあん)にふと父の声
同じもの見て食べ今朝の淑気かな
暖炉赤るこころあづけてゐたるかな
べたと地に貼りつき青し冬野草
日脚伸ぶ所望の寿司を提げ来たる
啓蟄や抱つこ手つなぎ肩ぐるま
背にははの手のぬくもりやしじみ汁
鳥帰る遥か戦の絶えぬ方

初湯

東京　浜田優子

再会のきつかけとなり年賀状
初湯して我が人生のどのあたり
田作へちいさいさかな大好きと
初買は夫に輪島の黒き箸
成人の日や祖父母四人揃ひをり
雪掻きを子に止められし気のふさぎ
雪の夜の外の明るさに身をさらす
梅香る道路予定地わきの家

岩牡蠣

東京　原田ミチ子

岩牡蠣の岩ごと炙り海にほふ
初乗りや右も左もスマホ族
湖に出で一月の富士極まれり
寒卵まだまだ学ぶこと多し
本復は成り行き任せ寒卵
寒菊の白さ飛び込む事故現場
千年を越えて恋の香歌ガルタ
読初は角の折れたるレシピ帳

綿虫

東京　春田千歳

瓔珞に綿虫ひとつ流れつく
柩置く冬薔薇が揺れ君が揺れ
味噌雑炊みな残党の貌をして
珠洲といふやさしき地名雪しまき
朴落ち葉踏んで身ぬちに炎の匂ひ
胸底のぽつぺん淡く音立てり
仏壇を少し眺めて春着の子
墓仕舞ははと綿虫ついてくる

生煮え

東京　平野豊雄

生煮えの老い携へて去年今年
柔和な眼マスク外せば意志の顔
ゆく年の猫の欠伸を覗きをり
『点と線』よぎる師走の新宿駅
老い猫に身の切れもどり恋の猫
木枯を聞く耳もまた風に鳴る
歩き方すこし忘れる冬ごもり
病む友の指美しき夕時雨

繰り言

東京　平野美子

冬の日の書架に陽のさす「創世記」
雪催まつ毛の白き人と会ふ
松籟のくり言を聞く水仙花
泥足の恋猫戻り夫と寝る
年賀客男も女もスニーカー
ぐるぐる巻のマフラーの上に顔が乗る
凧揚げや右へ左へ怒る風
牡蠣鍋の牡蠣が最後に見つかりぬ

世界の酒

東京　本多遊子

夕時雨名をカタカナで書いて待つ
カーディガンの毛玉増やして父逝けり
聖樹立つ金券ショップだらけの町
狐の襟巻ミシュランの星数へ
白線の内側に立ち年送る
ヨガスタジオぺたりと大き鏡餅
貼るまでに湿布丸まる霜夜かな
山眠る父の遺せし世界の酒

春待てり

東京　松本余一

闇のなかに雪の姿や三島富士
急須の蓋の穴の定位置寒の明
また逢うたいつかもここで蕗の薹
生と死が隣り合はせよ春驟雨
一泊の検査入院霾ぐもり
引く波に音の帰らず忘れ雪
死ぬるまでの時を測りつ木の芽風
訃報記事死因こだはる春の朝

煤払

東京　持田きよえ

ボロ市や缶ドロップを振れば音
天井の龍を労ふ煤払
付箋あるページを開く古日記
寄鍋や父母のこと猫のこと
小さき門夫と小さき松飾る
眉を引く日射したつぷり初鏡
日当りの良き初乗りのバスを待つ
フライパン形よく落つ寒卵

閏の年

東京　森尻禮子

待ちかねし閏の年の明けにけり
初夢や走り続けて雲のうへ
日にかざす生みたてといふ寒卵
「飛龍来雲」新春の書道展
線香の火より火事とは南無ほとけ
ぴしぴしと傘にわが身に寒の雨
指舐めて綿あめの味寒ゆるむ
冬の夜の愉しみそれは秘密です

蜆汁

東京　横須賀智子

受験子の笑顔待ちたる居間の黙
抜け髭を取りおく小箱猫の恋
砂を吐け本音を吐けと蜆汁
身は食はぬ祖母のこだはり蜆汁
繭玉や蚕をおぼこと呼びし里
風花や甲斐駒ヶ岳より届く
甲斐駒は理想の漢凍ゆるむ
疲れ寝る子等の番人雪ダルマ

花八つ手

東京　山田雅子

年詰る猿払鬼志別より帆立
大鳥居三つくぐりぬ初社
社殿どこも巻き上ぐ御簾や初明り
出会ひたる今日の一花や花八つ手
寒不動水かげろふのめらめらと
砂塵捲き上げ寒風の吹き荒ぶ
波音や浜に千余の掛け大根
山藍の小さき蕾寒風裡

キーウ俳句クラブ

東京　和田郁子

麦の芽の熟るる日遠し焼けし畑
春寒しすべての道に検問所
老いし兄のつなぐ手ぬくし年の市
やはらかに光る海山瀬戸の春
風花や小さき机の分教場
途切れなき地震速報冬逝けり
冴ゆる月無人探査機到達す
立春とや能登はまだまだ雪の中

天晴れや

東京　阿部草薫

天晴れや白無垢纏ふ冬の富士
初夢や翼竜に乗り中天へ
春爛漫風に吹かれてボブディラン
酔ひ桜すつてん転り将棋倒し
ビートルズ奇跡のリンゴスターズ！
山茶花に目白とまりてお花喰ひ
その藍に惹かるる夢の犬ふぐり
胸躍る幾たび咲いても薔薇の花

好日

東京　伊澤やすゑ

日々是好日籠に足す蜜柑
日記買ふ十年分の未来買ふ
冬の夜の積木積んでは崩しては
どちら見て語りかけやう大海鼠
雑炊やなにもなかつたことにして
踏みしめてやはらかき靴春を待つ
裾上げの糸はやとれて春隣
一升餅背負ひ尻餅あたたかし

春

埼玉　市村啓子

今朝の道水鳥憩ふ岸辺行く
熟考の言葉くるくる冬薔薇
強面に野心ありあり寒鴉
降る雪の恵みの雨となりにけり
頑なこころつまらぬ椿咲く
萌ぎ色竜をまあるく書く便り
地球寒し時々地震気紛れに
早春の気配胎動頬燃ゆる

初

埼玉　牛込はる子

耕運機の泥浴び嬉嬉と初鴉
初富士や吾が人生のラストラン
冬鷺や草川を蹴り陽を昇り
大川の寒鯉挙ぐる大飛沫
彼の世から戻つたと兄春の雷
春疾風ラインの合格通知受く
春雪の雷鳴木々を揺り起こす
早春の森言祝ぎの弦の音

フルート奏

東京　内海範子

母残す第九の譜面十二月
冬うらら自己流に髪切り揃へ
フルート奏冬の虹立つ一周忌
撒く米にふくら雀のいそぎ足
野良猫の尾にしがみつく枯葉かな
春の霜小さき庭の煌めいて
春の風ジャズに合はせてステップす
風二月肩に力を入れにけり

残雪梅

埼玉　大下壽櫻

空模様気に掛けながら春を待つ
緑茶飲み克己の気概春の立つ
降り初めはテヌートのやう春の雪
銀輪に飛礫ほど舞ふ春吹雪
咲かむとの門出に試練残雪梅
庭木から金剛ほどの雪解光
あと幾日耐ゆる他なき余寒かな
微温湯を使ふは贅か春浅し

自足

東京　太田裕子

夜鳴蕎麦すする漢の背に自足
鶯張りの廊下けきよけきよ行く小春
聖夜とや戦絶えざるこの星に
戦下なるピエタの涙聖夜の灯
クリスマスひつくり返つたおもちや箱
玻璃ごしに何か言うてる寒の月
みちのくの木仏の祈り春を待つ
春を待ち凭るや葛西の波郷句碑

山焼き

京都　小野直美

病床や師走の喧騒耳に入る
クラクション空へつんつん冬木立ち
忽然と白い静寂山眠る
刃物研ぐ指の太さや凍てる夜
寒灯木星高く天にあり
帰路につく看護職員風花す
裏門にボーイフレンド風花す
山焼きや無用な執着燃え尽くす

冬の浮雲

東京　金子かほる

団欒の聖樹見下ろす夫の墓
「寒かつた」とふ声帰宅夕日影
霜枯れや鉢の後ろの壁の染み
再会はもうないのかも年賀状
小正月クイズに答へ子に勝ちぬ
扁桃痛卵酒飲みなほ痛し
冬の浮雲余生ともあの世とも
寒禽の声が声呼ぶ地震の空

謝肉祭

東京　金田知子

冬の宿洞窟露天風呂恐し
MI（えむわん）観るお一人様のクリスマス
お土産に鶏皮餃子達磨市
まけとくと叫ぶおじさん達磨市
充電はコンビニの外雪女
「UFO」と歌つて踊る雪女
機内まで華やかヴェネツィア謝肉祭
朝市や星降る村の唐辛子

高砂

東京　金田喜子

お正月桃割れ結うて徹夜せし
七種の草刻みつつ里を恋ふ
千両も季の過ぎゆけば色あせて
朝まだき大寒の風肌に浸む
初夢や「高砂」謡ふ夫微笑む
春待てぬ盆栽眺む義兄逝きし
梵天の秋期大祭父仕切る
冬空に鳴き声あれど姿見ず

水仙

埼玉　菊地孝枝

手袋のやんちやな五本指家族
箱根駅伝デッドヒートの息白し
都心へと始発の尾灯初茜
初場所や龍昇るがに阿炎（あび）の四股
捨つるべき書籍重たし春炬燵
臘梅の鹿の子絞りや空を占む
如月の甍ぴしぴし日を弾く
捨て土に咲く水仙のなほ凛と

浮寝鳥

東京　北　好夫

窓磨く夫婦内外年用意
母遺す吾の通知表左義長へ
時雨るるや酒蔵巡る十石舟
病み上がり天塩少し韮雑炊
嘴を背ナに預けて浮寝鳥
胸鰭をゆくりゆくりと春の鯉
如月の駅舎見下ろすＫＩＴＴＥビル
谷戸の蝌蚪媼卒寿の野良仕事

初凪

東京　木山有衣

初凪や名句に余白見ゆるとき
寄せつけぬ白磁の壺や冬林檎
不忍池の案内板に冬日差す
迎春の東博に龍飛鳳舞書
選ばれぬ句にもひかりが初句会
湯豆腐を父母と取り分ける夢
絵葉書は鹿苑寺から八日かな
寒垢離の人を眺めて茶屋の中

貝の夢

東京　久保田勝一

厚岸は帆柱ごとの寒鴉
遊び声冬日のこころゆるがせる
貝の夢つひには眠る山の奥
雪女郎雪の向うに行き暮れる
指ふるる波紋光りて氷魚漁
クリスマスたれも昔は凡夫なり
ハムレットガーナで河豚の面冠る
七十億夜は夢みる冬銀河

初明り

埼玉　栗原季星

里宮に供ふ夫婦の櫟の実
茶の花の香や殉難の地に立たば
極月の水占恃み切りもなや
名山を四方に拝し初明り
能登の地震句友如何にとお元日
ラヂオ鳴る番屋は無人製氷池
終日を陽（ほ）は尾根越えず製氷池
早春や宝登山（どさん）へ柏市（かしわ）の山ガール

歴　史

東京　小坏　あゆみ

やっときた二月は逃げるというけれど
寒の月真砂のごとき我等刺す
口福や孫へのみやげ切山椒
病むちちに叔父は蜆を掬い来し
大笑い何度も爆ぜし新年会
ショパンの「遺作」胸しぼらるる冬の夜
春の虹我等は秘めし歴史もつ
石の上に三年すぎて春霞

無患子

神奈川　小泉　まり子

無患子を拾ひこころの豊かな日
菠薐草炒めが好きと言ふ少年
快方に向かふかのやう帰り花
小豆粥何事もなき一日なる
寒卵余生に光降りそそぎ
雪を掻く大根おろしのやうな雪
奥能登のなりはひ案ず冬の雷
春コート又どこかでと言ひ交はす

おめでたう

東京　幸喜　美恵子

Z世代も父親となり屠蘇祝ふ
玉砂利のひとつひとつに初日差す
お降りに肩を湿らせ絵馬結ぶ
初売りのフロアに流る「春の海」
新春の風にひらひら産着乾す
正月の陽をいつぱいに鳰の海
埃舞ふこともめでたき女正月
うつた姫来てゐる初場所砂被り

雪明かり

埼玉　小濱　けえ子

あん・きなこ十七人の餅を焼く
人生の味つけは「笑」福は内
地震の地にめの子産まるる雪明かり
護摩祈願して安堵せり冬桜
五年後は喜寿の祝ぞ日記買ふ
早春や背に字を書く小さき指
完熟の如くずつしり冬満月
掻き込みの昭和ゆとりの桜鯛（たい）茶漬

新社員

埼玉　小林　ゆきお

豆撒は斯くべしと父あらぬ声
どこまでが雪の白かや冬薔薇
凍鶴の燠を秘めたる胸かたち
年新た百歳目路へ点りたり
初春の柝の音清し大歌舞伎
寒鯉の潜りおおせぬ錦かな
二ン月の陽光珠と北育ち
その中に末は社長か新社員

春の雪

東京　小林　玲

春雪の清める庭の朝かな
探査機の成功祈る初満月
絶滅の狼棲むかウルフムーン
ごみ集収憶へてゐたり寒鴉
囀を破る鳥の鋭声かな
崩壊のこの星に棲み亀の鳴く
鬼やらふ豆大福を二つ買ひ
日永しと電波時計のよく止まる

春いまだ

千葉　斉藤　久美子

蒲団干す申し訳なく思ふ空
家計簿に使途不明金年逝かす
通りやんせ真つ赤に映ゆる初天神
変顔の得意な子等と福笑ひ
浅草の人込み抜けて寒満月
福達磨急階段の師の墓へ
麗かや犬も猫にも懐かれず
遠き日の能登の荒波春いまだ

寒卵

東京　島　昌子

時雨るるやダンス教室煌々と
数へ日やもうすこし頑張つてみる
寒晴や燈台白し波白し
家族増え笑み満面の賀状かな
初東風や飛び上がりさう絵馬の竜
晩年の余白を満たす寒卵
よく遊びよく働いて寒卵
箱根路やたすき靡かす二日富士

逃水

東京　嶋谷宗泰

追へば逃げ去れば追ひ来る逃水よ
鬼親の鬼やらひする吾が世かな
忘却は脳の断捨離はだら雪
おくびやうな冬芽を夕陽包みをり
光陰を遊び疲れて枯野道
輪島塗椀に七草入れ祈り
遠富士に新生児色初明り
日向ぼこ忘れ上手と惚け自慢

たびら雪

東京　清水悠太

元旦の歴史塗り替へ地震の国
読みさしの「こころ」にふいの落葉かな
革ジャンの似合ひし遺影片時雨
探しをる針一本や虎落笛
霜柱蹴散らし気鬱払ひけり
健やかな輪廻愛ほし冬木の芽
重力を軽くいなして牡丹雪
来し方の片々ゆかしたびら雪

湯たんぽ

埼玉　首藤久枝

湯たんぽを抱く故郷を抱くやうに
五十四の原発脅ゆ寒の地震
鳩尾にずどんと寒の太鼓かな
天と地に書くや平和と春遠し
元旦のラストランナーにこにこと
立春大吉四肢を大きく歩き出す
早春の光水切りの少年
終活の書類の束や春日差す

七草

埼玉　新海あぐり

ホチキスで楪二枚留めにけり
忘年会あつたことまで忘れゐし
年末ジャンボの列に笑顔の車椅子
江戸城を占拠の天皇誕生日
仕事納めの吾子臘梅を抱へ来し
境内の焚火に崩るる達磨かな
七草に入りし去年の八重桜
七草や「ゴンドラの唄」口遊む

枯落葉

岩手　菅原淑子

わが庭のごとし隣の実南天
冬とても日差眩しくなりにけり
妹が来てくれ勤労感謝の日
玄関の際へと吹かれ枯落葉
極月の日差しの強き一日かな
年賀状宛名書くのも人頼み
年の瀬や上り框に荷のあふれ
簡素なる注連を飾りて厨口

いざ初日

埼玉　杉渕真喜子

冬青空喜憂交互の我が人生
晩年に燃ゆるものとは冬花火
裸木の交差の向うシャンゼリゼ
早春や船に張りつく小さき貝
根府川蜜柑少女らの指しなやかに
いざ初日島影目覚む相模湾
書き初めの我に指示する店の母
五つ六つ福豆置きに子等の部屋

冬銀河

岩手　鈴木智子

支へ合ふかに一対の冬木立
南部富士くつきりと見ゆ冬立つ日
ふつふつと土鍋に煮立つ冬至粥
北国は雪雪雪や雪まつり
国境も戦場もなく冬銀河
鳥渡る約束の国あるごとく
そぞろ寒わが身のほどを労りぬ
省略を手抜とも言ひ雪を掻く

重き雪

岩手　鈴木藤子

あちこちに通行止めや山眠る
先に見る喪の記事冬の朝刊に
夜勤終へ雪の深さを語る夫
大映し初冠雪の岩手山
除雪車の置きゆく重き雪を掻く
儘ならぬ賀状を終ふ決意せり
雪を待つ新の長靴一年生
雪晴れの靴跡ひとつ轍中